城の崎にて

――高齢者文学人生論

志賀直哉（1873-1971)
　『城の崎にて』（1917)　「白樺」
　『暗夜行路』」（1921-37)「改造」
　『老廃の身』(1964)「朝日新聞」
参考：阿川弘之『志賀直哉』(1994)「岩波書店」

山の手線の電車に跳飛ばされて怪我をした

志賀直哉は大正二年八月十五日に山の手線の電車に跳飛ばされて怪我をしたが、命は助かった。何かが自分を殺さなかった、自分には仕なければならぬ仕事があるのだ、という気がした。

そんな仕事の一つが、大正六年作の『城の崎にて』。主人公の私は、背中の傷が脊椎カリエスになれば致命傷になりかねないが、二三年で出なければ後は心配はいらないと医者に言われて、後養生に、一人で但馬の城崎温泉へ出かけた。

或朝の事、一匹の蜂が玄関の屋根で死んでいるのを見つけた。

その蜂の死骸が流され、自分の視界から消えて間もない時、宿の近くの小川で大きな鼠が一生懸命に泳いで逃げようとしているのを見かけた。鼠には首の所に七寸ばかりの魚串が刺し貫（とほ）してあり、子供が二三人。四十位の車夫が一人、それへ石を投げていた。

そんな事があって、又暫くして、或夕方、町から小川に沿うて一人段々上へ歩いていった。何気なく脇の流れを見ると向こう側の斜めに水から出ている半畳敷程の石に黒い小さなイモリがいた。イ傍（わき）の小鞠程の石を取上げて投げると、イモリは力なく前へのめり、死んでしまった。

可哀想に思うと同時に、生き物の淋しさを一緒に感じた。自分は偶然に死なかった。イモリは偶然に死んだ。

城の崎にて　高齢者文学人生論

生と死を分ける運命を凝視する作者の意識は生の側にあって余裕があるように見える。
　それから約半世紀後、八十一歳で『老廃の身』を書いた。庭のほうから背の高い、綺麗な女がニコ／＼して入って来たので、雑誌社の婦人記者と早のみ込みして迎えた所、後から子供が一人ついて来たのを見ると、それは孫だった。女は信州にいる二番目の娘だということがわかった。
　老廃の身でもこの程度なら笑い話ですむ。毎年元旦の年賀客は五十人以上、そのうち孫の数は十三人。「小説の神様」の悠々たる大晩年だ。「出来れば米寿の祝いだけは子供や孫達にして貰ってもいいかという気が近年はしている」。
　しかし、八十八歳になると他界し、米寿を祝う会を催されていない。『老廃の身』を書いてからの七年間については本人の記述がほとんどないのでよくわからないが、阿川弘之『志賀直哉』によれば、テレビを指して、「こんなものを見ていても筋なんぞサッパリわからない」「老いぼれて、気力が全くなくなって、――そればかりでなくアタマがおかしい。ヘンなんだよ。・・・・・もう生きているのが面倒なんだ。こういうの、老苦というものの中にはいるんだろう」と編集者に云ったり、娘の前で、もう生きているのがいやだと、首をくくる真似をしたこともあるという。

幸福は弱く　不幸は強い　　志賀直哉